

「啓示され、生まれ変わる」 2019/03/30

(ヨハネの福音書 14:21)

ビマ・アラグ

(セッション1)

前回学んだヨハネ4章を少し復習してから、次へ行きたいと思います。

今日の世界を見ると、ほんの2、3年の間に随分変わってきています。

世界が変化するスピードは、非常に早くなっていると思います。

それに伴い様々なおかしなことが起こってきており、たとえば地球温暖化防止などを唱えるアメリカのある団体は、一つの新興宗教のようになっています。

その旗振り役をしているアレクサンドリア・コルテスという下院議員の女性がいますが、若干29歳でありながら、アメリカを変えるんだと言っています。

ヨーロッパ各地でも同じような動きがあり、若い女性が子どもを産むかどうかという議論が起こっています。子どもを持たなくても良いという意見が強くなり、チャイルド・ストライキをしています。

若い女性たちが子どもを作ることに対してストライキをしているのです。

しかし、創世記には「産めよ、増えよ、地に満ちよ」(9章7節)とあり、それでは神様に背を向けてしまっています。そこには希望がありません。

先述した(「グリーン・ニューディール」と呼ばれている)環境保護団体は、新しい宗教のようになっています。

そうした形で世界を統合していこうという流れがあるのです。

例えば、環境に悪いから飛行機や車に乗らないようにしようとか、牛が二酸化炭素をたくさん出すから飼うのをやめにしようとも言っています。

さらには、人が多すぎるから産まないようにしようとか、子どもが生まれてもその子どもを殺す権利が母親にはあるはずだと言うのです。

実際、そうした法律を通そうともして、それは出産直後に母親がその子どもを殺しても良いというものです。

なぜ、そんなことになるのかというと、神様を知らず希望がないので、自分の力でなんとか解決しようとするからです。(ローマ1:28-32)

また性に関して言えば、「性別を決めない」という考えがあります。人類にあつて、そのような惑わしが起こっているのです。

そして、その流れは大きくなってきています。

新しい世界政府を作ろうという思惑があるからです。(バベルの塔を建てた)ニムロデは、それをしようとしてしました。

神様から離れて人をかき集めてきて、何かを作ろうとしてしました。

今日のこれらの動きから、ニムロデの霊が戻ってきたと言えるのかもしれませんが。

インターネット通販のアマゾン(Amazon)が、音声認識のアプリを作っています。アップル(Apple)でいうところのシリ(Siri)です。

アマゾンの音声ガイドは、男でも女でもない「Q」という音声で造られています。

なぜ、そのようなものを作ったのでしょうか?—神が神聖と言うもののすべてを破壊したいからです。

この背後にはサタン(悪魔)の霊の働きがあると思います。神が定めた聖いものを壊したいという意志があると思います。

聖書には、「神は人間を男と女に造られた、(創世記1:27)と書かれていますが、それを破壊し、何か新しいものを造ろうとしています。

イギリスのヘンリー王子が、アメリカの映画女優と結婚しました。(有名なフェミニストである)彼女は、生まれた子どもの性別を男か女で決めたくないと行って、中性ということにしました。

このように、神聖なものを破壊しようとする背後には、ニムロデの霊の存在があると思います。

同じようなことが教会でも起きています。

アメリカにリバティー大学という大きなキリスト教大学がありますが、そこの学長が「孫娘を女の子として育てたい」と言ったところ、30人程の生徒が集まってきて、その発言を撤回するように迫ったそうです。

有名な大学で、生徒も皆クリスチャンのはずなのに「女の子を女の子として育てる」と言っただけで、そのような大きな反対が起きました。

学長の発言が、トランスジェンダーに対する差別発言だといってとがめるのです。

この世の中にこのような混乱があるのはわかりませんが、クリスチャンの間でも、なぜ同じような混乱があるのでしょうか。

それは、聖書が頭だけの知識でとまっているからです。——イエス・キリストに関する個人的な啓示がないからです。

イエス・キリストを本当に知らなければ、生まれ変わるということはありません。

ここで、詩篇を見てみましょう。

103:7 主は、ご自身の道をモーセに、そのみわざをイスラエルの子らに知らされた。

ここでは二つのことばが大切です。一つ目は「知らされた」ということです。二つ目が「そのみわざを」です。

モーセは神の道を知っていましたが、イスラエルの民はその御業(みわざ)を知っていません。

まず、この「知らされた」という部分を見てみたいと思います。

「知る」ということは、モーセが神から啓示を与えられていたということです。頭だけの知性・知識とは違います。「霊の目が開かれる」とか「心の目が開かれる」という意味があります。

これは重要なことで、すべてのクリスチャンがイエスの啓示を受けるということです。

啓示というのは、ただ単に「空に何かか浮かんでいる」とかいうことではなくて、「確信として与えられる」ということです。

イスラエルの民は啓示が与えられたのではなく、その御業を見ただけでした。

彼らは、紅海が真っ二つに分かれるのを見ました。また40年の間、荒野で毎日、何百トンの水が与えられたのを見てきました。40年間、二百万人の人の必要を満たす大量の水が砂漠で与えられるというその奇跡を毎日見ていましたが、常に神を疑っていました。

彼らには水もマナもあつたし、時にはウズラも与えられていました。夜の寒さから守られるため火の柱が与えられ、昼は雲の柱が与えられ、強い日光が直接当たらないようにされました。

しかし、7節で書かれているように、モーセは神を知っていたのですが、民は御業を見ただけでした。

同様に、イエス・キリストは二千年前、多くの奇跡を行いました。ほんの少しの人しかイエスを知ることではできませんでした。

民数記を見てみましょう。

12:3 さて、モーセという人は、地上のだれにもまさって非常に謙遜であった。

英訳聖書では、ここはカッコ書きになっています。日本語訳ではカッコではないようです。

この箇所は、モーセではなくヨシュアが後に追記したといわれています。

“モーセは謙遜だった、”と書かれていますが、モーセ本人がそう書いたとは思えないからです。40年間モーセを見てきたヨシュアが書いたと考えるのが妥当でしょう。

モーセはイエス・キリストのひな型になっています。モーセは律法を示し、イエスは恵みを示しました。

聖書には、イエス・キリストは謙遜な神の子羊と書かれています。モーセも謙遜と書かれていますが、どのような人だったのでしょうか――。

“謙遜だった、”とあるのは、啓示が与えられていたからです。神の霊があつて、神の御心を知っていたからです。

ヘブル書を見てみましょう。

11:24 信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、

11:25 はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。

11:26 彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。

11:27 信仰によって、彼は、王の怒りを恐れないで、エジプトを立ち去りました。目に見えない方を見るようにして、忍び通したからです。

ここでモーセはエジプトを拒絶したとあります。

続いて、第一ヨハネです。

2:16 すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。

この箇所とヘブル書を対比してみると、モーセがこの3つの欲を拒絶したことがわかります。

ヘブル書11章の24節は、暮らし向きの欲について言っています。モーセはパロの娘の子としての社会的地位を拒絶しました。王になる可能性もあったと思います。

25節では、肉の欲の拒絶です。“苦しむことを選んだ、”と書いてあります。神の民とともに苦しむことを選びました。

26節にあるのは、目の欲の拒絶です。モーセは、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。

これらは、我々信じる者に対する警告ともいえます。

今日のクリスチャンは、教理を知ろうとします。

正しい教理を学ぶということは、良いことではありますが、プライドに結びつくことがあります。それが“自分自身が変わられていく、”ということに結びつかないからです。

“変わっていく、”のは、イエス・キリストから啓示があつてからです。それは、キリストを理解するということです。

パウロについても同じことが起こりました。

ペリピ書3章を見てみましょう。

3:7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。

3:8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとと思っています。それは、私には、キリストを得、また、

3:9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。

この箇所パウロは、自分に得であったものがすべてゴミであったと言っています。しかし、10節には、

3:10 私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、

「キリストとその復活の力を知り」とありますが、モーセが神の道を知っていた（詩篇103）のと同じように、パウロもキリストを知っていました。

パウロはキリストに出会いました。キリストに出会ったときに、自分が大事だと思っていたものが、何の価値もないということを知りました。

知識というものは確かに役に立つのですが、それ以上に「キリストを知る」ということが、一番重要なことです。

イザヤ書6章にも、同じことが書かれています。イザヤが幻を見たときに、彼はひざまずいて神を知ったと書かれています。

6章以前では、イザヤはイスラエルの民を非常に非難して自分の思いや力で動いていました。

しかし、6章5節には「私は、もうだめだ」と書かれています。

5章ではイスラエルの民は悪に満ちていて災いだと言っていますが、6章になると「自分は、汚れていて災いだと言うようになりました。「私はくちびるの汚れた者」であると告白しました。

5章ではイザヤはイスラエルの民を裁いていたのですが、自分自身も汚れていることに気づきました。イザヤに神の啓示があったからです。

神を知ったということによって、自分自身をも知るようになりました。自分の汚れについて、正しく理解しました。そして、彼は謙遜になりました。

「啓示——神を知る」ということが、悔い改めであったり、その人が変わっていくということに結びついていきます。

次にマタイの福音書27章44節、

27:44 イエスといっしょに十字架につけられた強盗どもも、同じようにイエスをののしった。

この物語は皆さん知っていると思いますが、2人の強盗がイエスと一緒に十字架にかかっている、イエスを罵っていました。2人の強盗は、処刑されている最中であるにもかかわらず、イエスを罵っていたのです。

しかし、その後に強盗のひとりが、啓示によりイエス・キリストを知って悔い改めたと書かれています。（ルカ23:40-42）

その強盗は、イエス・キリストが神の子だと知りました。そこには教理はありませんでした。福音のメッセージを聞いたわけでもなければ、宗教的教理をもっていたわけでもありません。

「イエス・キリストを知った」ということから、彼の考え方が変わりました。

イエスは十字架上で肉体的にも限界でした。この死にかけた人を見て、彼はどのようにして信仰を持つことができたのでしょうか。——普通に考えたらあり得ないことですが、彼はその状況でイエス・キリストを知りました。

宗教家はイエス・キリストは偽物だと非難していたのです。彼らは教理に関しては完全と言える人たちです。そして、政治家が処刑すると決めた死にかけている人を、どうして彼は信じたのでしょうか。

十字架のそばにいたローマ兵は、異邦人でした。十字架上の強盗はユダヤ人でした。強盗のひとりはずきリ
ストを神の子と呼び、ローマ兵も「この人は神の子だった」と告白しました。

この兵士にも啓示が与えられ、イエスが神の子だと理解したのです。

新約・旧約から、このような例をあげました。

前回、ヨハネの福音書4章から学びましたが、ここで一回復習してみましょう。

ヨハネの福音書4章25節です。

4:25 女はイエスに言った。「私は、キリストと呼ばれるメシヤの来られることを知っています。その方が
来られるときには、いっさいのことを私たちに知らせてくださるでしょう。」

女はキリストに対する知識は持っており、教理も理解していました。聖書でメシヤが来るということを知
り、確信をもって知っていました。

続いて、26節です。

4:26 イエスは言われた。「あなたと話しているこのわたしがそれです。」

イエスは女に対して、自分がキリストであることを宣言しました。イエス・キリストは、そのように自分
を啓示しました。

しかし、ヨハネ3章でニコデモには、自分がキリストであることを言いませんでした。「あなたは生まれ
変わらなければならない」とだけ言われたのです。

ニコデモは、ラビの中のラビでしたが、イエスのことばを理解することができませんでした。「なぜ、理
解できないのか？」とイエスはニコデモに言いました。

それは、エゼキエル書での預言を律法学者たち皆が、知っていたからです。骨に向かって預言すると、そ
こに息が入ってよみがえったという箇所（エゼキエル37章）です。

これは神だけができるということを専門家であるラビは知っていたのですが、ニコデモはこれには本
当には理解することができませんでした。

一方、サマリヤの女にはご自分を示されたのですが、その後彼女はどのようにしたのでしょうか？

ヨハネ4章28節にあるように、啓示が与えられ、はっと気づいた後の彼女に異変が起きました。

4:28 女は、自分の水がめを置いて町へ行き、人々に言った。

ヨハネはなぜ、この話を福音書に残したのでしょうか。彼女が水がめを置いていったということを知り、なぜ
記録したのでしょうか。——彼女の水がめでは、彼女の渇きを癒すことができなかったからです。彼女の宗
教や行いでも、彼女を救うことはできなかったからです。

彼女はそこでメシヤに出会って変わり、喜びに満たされたのです。

このように、キリストを知ることや啓示を与えられることなくして人が変わるということはありません。
これを覚えておいてください。

1コリント2章を見ましょう。

2:6 しかし私たちは、成人の間で、知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でもなく、この世の過ぎ去っ
て行く支配者たちの知恵でもありません。

2:7 私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、
世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。

2:8 この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。

ここでは「隠された奥義（ミステリー）」ということばが出てきます。

ギリシャ語で「ミステリオ（μυστήριον）」と言いますが、これは「明らかにされた秘密、という意味です。神のみが明らかにすることができる秘密です。

「隠された奥義」……これは世界が始まる前からあり、人々が知ることはできませんでした。

旧約聖書は、知識をもとにして理解するものです。これに対して新約聖書は神からの啓示のようなものですが、聖書にない新しい啓示というものではなく、神ご自身をキリストを通して明らかにしたものです。

エペソ1章17節を見てください。

1:17 どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。

「神を知るための知恵と啓示」です。

次に、マタイ16章15節から18節、

16:15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」

16:16 シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」

16:17 するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。

16:18 ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。

「人間ではなく、天にいるわたしの父がそれを示しました」と書かれています。

ここでは、18節が重要ですが、これはどういう意味でしょうか？

人によっては「ペテロの信仰告白の上に教会を建てる」という意味に取っています。カトリックでいうと、ペテロを岩としてしまっています。

しかし、ここで言われていることは「イエス・キリストが、イエス・キリストの方法で、彼の教会を建てる」ということです。

教会を建てるにはレンガを積み重ねていきますが——、それで言うなら、ペテロが啓示を受けて、キリストの教会の「最初のレンガ」になったのです。それと同様に、キリストの教会のレンガ一つ一つが、啓示を受けた一人ひとりだということです。

つまり、ここで言う「教会」とは「神が誰か」とか「イエスがどのような方か」を啓示を受けて知った人々で作られたものです。

また、「ハデスの門もそれに打ち勝つことはできません」とありますが、門というのは、人の出入りを管理する所です。そこで管理人は、その人が入って良いか悪いかを権限をもって振り分けます。

そのため「門」というのが「権力」に置き換えられ、「ハデスの門」とは「サタンの権力」と置き換えられます。

サタンの力によっても、それに打ち勝つことはできないという意味です。

なぜなら、一つ一つのレンガなる人々に、イエスの啓示が与えられているからです。

旧約聖書でも同じような例があります。

例えば、出エジプト記3章にある「モーセと燃える芝、についてです。

3:5 神は仰せられた。「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。」

なぜ、履物を脱がなければいけないのでしょうか？

「聖い、とか「聖なる、の反対のことばは「呪われている、になります。

創世記3章の中で「地は呪われた、と書かれてあります。神はアダムとエバを呪ったのではなく、地とサタンを呪われました。この地はサタンに属しているものです。

この「聖なる地、にきた時、モーセはエジプトの知恵をもったままで来ました。これは神殿の中に行くようなものでした。神殿には祭壇があり、祭壇では生贄（いけにえ）を捧げます。「私たちは罪人であって、その私の身代わりとして生贄を捧げます、という意味です。

モーセは燃える芝の前で、神と対面しました。燃える芝は、生贄を燃やす火のようなものです。履物は「呪われた地、を歩き続けた物です。――これは、霊的な意味での話です。

この世の中の知識・知恵・価値観をもつのでなく、それらを捨ててから来なさいという意味です。

新約聖書でも同じです。

イエスは弟子たちの足を洗いましたが、なぜでしょうか？

弟子たちはイエスと共にいましたが、この世の中を歩くうちに徐々に汚れていったので、足を洗うことで清める必要があったのだと思います。

イエス・キリストご自身で、彼らを清める必要がありました。弟子たちに向かって「自分で洗ってきなさい」とは言いませんでした。

レビ記10章3節を見ます。

10:3 それで、モーセはアロンに言った。「主が仰せになったことは、こういうことだ。『わたしに近づく者によって、わたしは自分の聖を現わし、すべての民の前でわたしは自分の栄光を現わす。』」それゆえ、アロンは黙っていた。

この箇所には「私に近づく者は清められていなければならない、と書かれてあります。

また、ヨハネ1章14節には、こうあります。

1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

神のことばが人となったという啓示です。――神が人となってご自分を示されました。

1 テモテ3章16節、

3:16 確かに偉大なのはこの敬虔の奥義です。「キリストは肉において現われ、霊において義と宣言され、御使いたちに見られ、諸国民の間に宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。」

奥義が啓示で示され、栄光が示されたということです。

「霊とまことの礼拝」

(セッション2)

第1セッションでは、啓示について話しましたが、第2セッションでは、礼拝について考えていきます。

では、質問から始めます。

ルシファーが墮落してしまった原因とは、なんでしょうか？

(聴講者の返答——「プライドですか？」)

確かにプライド(傲慢)が原因だと思いますが、神に対する礼拝というものを自分に対する礼拝にしたいという願望があったことが書かれています。神の礼拝や栄光というものを自分のものにしたいという思いがあったと思われます。

イエスは同じように誘惑されました。

サタンは、イエス・キリストに向かって「私に向かって礼拝したなら、この世のすべてのものを与えよう、と誘惑しました(マタイ4:9)。

もし、神に背を向けたなら、サタンと向き合うことになります。目の前には、サタンがいると思います。人は礼拝するために造られました。——神を礼拝しないなら、サタンを礼拝することになると思います。

ヨハネの福音書4章21節から見てみましょう。

4:21 イエスは彼女に言われた。「わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます。

サマリヤでは、ゲリジム山に自分たちの礼拝所がありました。130年前に神殿が崩壊されたので、建物がない跡地で礼拝していたようです。

“この山でもなくエルサレムでもない場所で、あなたがたが父である神を礼拝する時が来ます——”

4:23 しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。

“真の礼拝者、ということばが、多く使われています。“真の礼拝者、とは、どのような意味でしょうか。

“真の礼拝、とは、“全てにおいて明け渡す(屈服する)、“ということだと思います。つまり、最も大切なものを全て差し出している状態だと思います。

旧約聖書の創世記では、アブラハムが「主を礼拝する」と言って、イサクを連れて山に行きました。イサクという一番大事なものを捧げるためです。

そして、これが聖書で「礼拝」ということばが使われている最初です。

創世記22章5、6節、

22:5 それでアブラハムは若い者たちに、「あなたがたは、ろばといっしょに、ここに残っていなさい。私と子どもとはあそこに行き、礼拝をして、あなたがたのところに戻って来る。」と言った。

22:6 アブラハムは全焼のいけにえのためのたきぎを取り、それをその子イサクに負わせ、火と刀とを自分の手に取り、ふたりはいっしょに進んで行った。

ここでアブラハムは、息子に「ギターを持って山に登れ」とは言っていません。では、ピアノを持って？ ドラムでしょうか？ …違います。

今日礼拝というと、そうしたことを連想すると思います。

日曜礼拝は時間割通りに進められ、礼拝と賛美が混同されているように思われます。本来「礼拝（ワーシップ）」とは、音楽を奏でることではありません。今、教会で行われている「礼拝（ワーシップ）」は、賛美や感謝に当たるものです。

また、礼拝というと宗教的行事を連想すると思いますが、それも本来の意味から離れています。「主を礼拝する」のは、日曜日の数時間だけでなく「いつも」であるべきなのです。

本来「礼拝（ワーシップ）」というのは、「神を崇拜すること」だからです。「神のことばを遵守すること」でもあります。

月曜日になったら、神を崇拜することをやめてしまうのでしょうか。自分の生活スタイルと妥協してしまうのでしょうか。

ヨハネ4章には「真の礼拝者を神は探しておられる」と書かれています。

アブラハムがイサクをモリヤ山に登らせた時、薪を運ばせました。「礼拝」ということばは、ここで初めて使われました。

神はアブラハムに「あなたのひとり子を捧げなさい」と言われ、アブラハムはそれに応えました。この一番大切なものをもって神の前に臨んだのです。捧げるとはこういうもので、アブラハムはこのように一番高い代償を払いました。そうでなければ「礼拝」とは言えません。もし何も犠牲を伴わないなら、それは礼拝ではありません。

次にヨブという人を見てみましょう。ヨブ記1章20節です。

1:20 このとき、ヨブは立ち上がり、その上着を引き裂き、頭をそり、地にひれ伏して礼拝し、

1:21 そして言った。「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」

1:22 ヨブはこのようになっても罪を犯さず、神に愚痴をこぼさなかった。

サタンは、ヨブのすべてを取り去ってしまいました。しかし、ただ一つ残されたものがあります。それは、なんでしょう？

ヨブの身边で一人だけ触られなかったのが、ヨブの妻です。なぜ、サタンは妻だけは殺さなかったのでしょうか——。それは、ヨブの妻という人が、サタンに使われていたからです。彼女は、ヨブに「神を呪って死になさい」と言って、ヨブに罪を犯すことができる唯一の人でした。

アブラハムのケースでは、一番大切なものを捧げましたが、ヨブのケースでは、自分の状況に関わらず神を礼拝しました。

ヨブはこのような絶望的な状況でも神を礼拝していました。彼は地に伏して、頭を下げていました。これは謙遜を示しています。中東や東洋の文化では、誠意や崇敬を現す時など頭を地に付けひれ伏しますが、そのように礼拝していました。

ヨブは、ギターもピアノもなしで礼拝していましたし、「今、私の心は苦しいので礼拝できません」とも言いませんでした。

「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」と言いました。……なぜ、ヨブは愚痴をこぼさなかったのでしょうか？

「どこで、とか」どのような状況で、などは関係ないと思います。重要なのは「誰を、礼拝しているか」です。

そこで創世記の初めを見てみますと、アベルとカインがいました。カインもアベルも神を礼拝する人でした。（当時は無神論者など、いませんでした）

アベルの捧げ物は受け入れられ、カインの物は受け入れられませんでした。——なぜ、カインの物は受け入れられなかったのでしょうか？

カインが血の捧げ物を持ってこなかったからだという人がいますが、聖書を読んでもみると、もっと深い意味があると思います。

創世記4章5節、

4:5 カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。

注意深く読むと「カインとその捧げ物には目を留められなかった」とあります。アベルは自分を罪人と認識していて、貴重な羊を捧げました。カインは、地の作物を捧げました。この箇所では重要なのは、彼らの心のあり方だと思えます。

旧約聖書には「初穂を持って来なさい、と書かれています。ですから、地の作物を持っていくこと自体は悪いことではないと思えます。

アベルは羊飼いだっただけで、小さい頃から育てなければいけなくて、羊は手間のかかる高価なものだと思います。アベルは自分の持っている一番良い物を捧げました。

創世記4章4節には、「また、アベルは彼の羊の初子の中から、それも最良のものを、それも自分自身で、持って来た。主は、アベルとそのささげ物とに目を留められた。」とあります。

神は、アベルの心と捧げ物とを受け入れられました。それは、教会で派手な演出で演奏することではないと思えます。

ここでまた、サマリヤの女の話にもどりましょう。

サマリヤの女はゲリジム山で礼拝し、ユダヤ人はエルサレムで礼拝しました。サマリヤの女は、自分が不可触民であることを理解していました。ユダヤ人が彼女のコップから水を飲まないことを知っていました。

ヨハネの福音書、

4:4 しかし、サマリヤを通過して行かなければならなかった。

イエスがサマリヤを通過して行かなければならなかった理由——それは、そこに神を求めているサマリヤの女がいること、その叫びをイエスが知っていたからです。

彼女の中には、飢え渇きがあったと思えます。礼拝したかったのに、礼拝する場所も、どうすれば良いかも知らなかった——サマリヤ人は不可触民でライ病に侵された人と同じ扱いだったからです。

私たちも、このサマリヤの女と同じだと思います。

そして、これが福音なのです。

私たちもまた、飢え渇いた者です。そのためイエス・キリストは、天から地上に来なければいけなかったのです。…急いで来なければいけなかったのです。

——イエスはエルサレムに行って十字架にかからなければならなかった、

——最後の晩餐をしなければならなかった、

——サマリヤに行かなければならなかった、

…のです。

イエスは、サマリヤの女に真の礼拝者とは誰かを伝えました。

旧約の真の礼拝者は、身体を動かして、また口からのことばによって礼拝していました。ダビデは裸で踊って礼拝しました。（妻からは、とがめられました）

このように旧約時代は、音楽と歌と踊りによって礼拝していましたが、新約時代では一歩進んで、霊によって礼拝することができるようになりました。

神殿には、「外庭」と「聖所」と「至聖所」がありますが、これは一つのパターンで、人間にも同じように「肉体」と「魂」と「霊」があります。

神殿には、聖所と至聖所を仕切る幕があり、至聖所には契約の箱があります。（パターンの図式を示す）そして、イエスは「真の礼拝者が求められる時が来る。今がその時だ」と言いました。

ヨハネの福音書、

4:23 しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのように人々を礼拝者として求めておられるからです。

「時が来る」と「今がその時」では、矛盾しているように見えます。

これは、どういうことでしょうか？

—なぜなら、イエス・キリスト自身が、正当な礼拝をした最初の「真の礼拝者、だったからです。

（図を指して）イエスには、人間としての肉体・魂・霊があります。聖書を見ると、イエスは、朝早く起きて静かな場所で神を礼拝していたとあります。これは、神の霊とイエスの霊が礼拝しているということだと思えます。

神は霊です。神の霊は至聖所から出てくることはなく、我われがそこへ行かなければならないのです。肉体と魂で礼拝するなら、身体を動かし、また感情的にも涙を流して歌ったり、思いによって祈ることもあります。しかし、それにもまして、霊とまことをもって礼拝するということは、霊によって神の霊に礼拝することです。

イエス・キリストは「先駆者」とも言われます。「先駆者」なので、先に来て皆の手本になるという意味があります。

ヘブル人への手紙6章です。

6:19 この望みは、私たちのたましいのために、安全で確かな錨の役を果たし、またこの望みは幕の内側にはいるのです。

6:20 イエスは私たちの先駆けとしてそこにはいり、永遠にメルキゼデクの位に等しい大祭司となりました。

イエスは幕の内側に入り、そこで礼拝しました。この「幕」が、大事です。

この「幕」ということについて、さらに、ヘブル書10章を見てみましょう。

10:19 こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができるのです。

10:20 イエスにご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。

ここに「新しい生ける道」と書かれていますが、「生ける道」とは、なんでしょうか。（20節の「垂れ幕」は、自分の思い・意志（self-will）と言えます）

「イエスにご自分の肉体という垂れ幕を通して…」の、「肉」ということばですが、自分の思いと誤すことが多いです。

イエス・キリストは自分の思いを十字架にかけて「私の思いではなく、あなたの御心がなりますように」と生きられました。このようにして新しい生ける道を設けてくださいました。

イエスは自分の願望を満たすために生きたりはしませんでした。神の御心を行うために生まれましたし、神の御心をなすために生きました。

ヨハネ4章にも、そのことが書かれています。

4:31 そのころ、弟子たちはイエスに、「先生。召し上がってください。」とお願いした。

4:32 しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしには、あなたがたの知らない食物があります。」

4:33 そこで、弟子たちは互いに言った。「だれか食べる物を持って来たのだろうか。」

4:34 イエスは彼らに言われた。「わたしを遣わした方のみこころを行ない、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。

4章には、たくさんの象徴が出てきます。

“水”、“食物”、“飲むこと”、“食べること”、“ぶどう酒”、“血”、…すべてに意味があります。

サマリヤの女は“水”を理解しませんでした。この箇所では弟子たちが“食物”のことを理解していませんでした。サマリヤの女も弟子たちも肉体的な話しをしていましたが、イエスは霊的な話しをしていたのです。

肉体的には、水なしでは生きていけません。人は3日間水なしでは死んでしまうし、砂漠だと2日ともたないと言われています。

食べ物に関しては、食べなくとも1、2週間は生きていられます。

“水”は霊的な意味では“聖霊”を意味しています。“聖霊の賜物を与える”とイエスは言われました。

使徒行伝2章38節、

2:38 そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けられるでしょう。

ここでは、ペテロが“悔い改めて聖霊を受けよ”と言いました。聖書に出てくる“霊の賜物”、というのは“異言”、とか“癒し”、のことではありません。

“真の礼拝者”になるためには、聖霊の助けが必要です。そして、クリスチャンとして生きるために、それは必要なのです。

繰り返しますが、多くのクリスチャンが福音の半分を見落しています。

前回話した“溺れている人のたとえ話し”、ですが、もし人が溺れて水を大量に飲んでしまったなら、そして助けを求めていたなら、自分で自分を助けることはできません。誰かが飛び込んで引き上げなければなりません。外部からの助けが必要です。

溺れた状態で水の中にいれば、やがて死んでしまいます。水から上がったなら、もはや溺れてはいませんが、その人をそのままにしておくのではなく、人工呼吸をして水を吐き出させます。

これは、私たちの思いや生き方からエジプトを追い出すようなものです。

聖書の学び会などは、私たちの考えを正すために必要だと思えます。しかし水から上がったなら、口から口へ息を吹き込み、呼吸をさせなければなりません。

多くの福音伝道は、溺れた人を水から引き上げはしますが、そこで終わってしまっています。しかしそれでは、その人はそこで死んでしまうのです。

水から出て、(霊的には)エジプトから出たとしても、荒野でさまよってしまうと、どうしてよいかかわからず、主の平安がありません。

そこで「もっと聖書を知らなくて」と、よく読んで、ヘブライ語やギリシャ語を学んでみるのですが、やはり平安はありません。——ここで必要なのは“聖霊の賜物”、だからです。

ヨハネ4章では、「水」と「食物」が出てきました。

「水」は「聖霊」を現しています。水がなければ肉体的に生きられないように、聖霊がなければクリスチャンとして生きることはできません。聖霊が来て生かされなければ、そのまま私たちは死んでしまうのです。

「食物」は「みことば」と「イエス」も象徴しています。聖書を読まずして生きることはある程度できますが、徐々に汚れていきます。水が身体を清めるように、みことばは私たちを清めていきます。

ですから、「水」と「食物」——「聖霊」と「みことば」の両方が必要です。

ヨハネは多くの比喩表現を使っています。たとえば2章のカナの結婚式のとき、マリアはぶどう酒が切れたとイエスに言いました。この箇所は、初めの「奇跡」ではなく「しるし」と言われました。

なぜなら、カナの結婚式の出来事が、イエスが行ったメシヤ(神)としての最初の働き(しるし)であるからです。

イエスは「6つの水がめを用意して、水をいっぱいにしなさい」と言われました。6つの水がめというのは、人を象徴しています。

これはつまり、聖霊は人(水がめ)の内側いっぱいまで注がれる必要があるということです。

イエスは「溢れるほどいっぱいまで水を入れなさい」と言いました。そしてそこまでいくと、水がぶどう酒に変わりました。「ぶどう酒」は、ユダヤ人にとって「喜びが満ちあふれていること」の象徴です。

これが「最初のしるし」であって、イエス(神)だけができるものです。そして、それを行うためにイエス・キリストは、十字架にかからなければなりませんでした。

荒野では、モーセが岩を打ちました。そして、水が溢れ出しました。水が溢れて人々は満たされ、40年間、水に困ることはありませんでした。

同じように、イエスは打たれて十字架上で血を流さなければなりませんでした。それによって聖霊がくだって、私たちに溢れんばかりに注がれます。水がぶどう酒に変異することにより、主にある喜びが湧き上がります。

そして、この喜びに関して、状況というのは、ほとんど問題ではありません。経済的な問題や健康上の問題などがあるかもしれませんが、それでもこの喜びはなくなりません。

この世の中では「喜び」ではなく「幸せ(幸福)」を求めています。

確かにお金があれば幸福かもしれませんが、たくさんバカンス(休暇)があれば幸福かもしれません。しかし、そのバカンスから戻ってくると、次第に心は沈んでいってしまいます。なぜなら、バカンス以外にも自分を喜ばせるような何かを、いつも必要としているからです。

ヨブのように、どのような状況であっても神に祈り、礼拝し、神に栄光を捧げる人がいます。彼の妻は「神を呪って死になさい」と言いました。なぜなら彼女は、状況による幸せを求めていたからです。大事なものは、ヨブのように状況によらない姿勢です。

イエス・キリストは「先駆者」として、自分の思いを十字架にかけなければなりませんでした。「自分ではなく父の御心がなされますように」、「父の御心を行うことが私の食物です」とイエスは自分を捧げて他を救うために来られました。

このように、ヨハネ2章から福音のあり方を見ることができます。これが理解できると他の部分も理解できるようになります。

「感謝」というのは、主がなさったことに感謝するのであって、「賛美」というのは、神がどういう方かということに対する賛美です。神が善であり、恵み深い神ご自身を賛美するということです。

「礼拝」は、霊によって礼拝することであり、それは「関係性」です。外庭にいても礼拝はできますが、至聖所の中を見ることはできません。しかし聖所に入ると、そこには燭台とパンがあります。

そこでは感情や魂、知性をもって礼拝できると思いますが、幕があって、やはり至聖所の中を知ることはできません。

イエス・キリストは、ご自分の思いを否定したことで肉が断たれて幕を通過して中へ行かれました。至聖所の中では、霊と霊の関係をもって礼拝がなされています。

神は“真の礼拝者、を探しています。至聖所に入って礼拝する人を探しています。神は霊であるので、霊と霊との関係が必要だと思えます。

イエスは“その時がいずれ来る、と言われました。

ヨハネ4章23節をもう一度、見てみましょう。

4:23 しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。

私たちの思いが聖霊と一致している時が“真の礼拝、の時だと思えます。聖霊が臨んで私たちの人生すべての領域を支配されていることだと思えます。

ローマ人への手紙12章1節を見ます。

12:1 そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。

ここに「礼拝」ということばがあり、「聖い、生きた供え物としてささげ なさい」とあります。これは、私たちの生きた思い (self-will) というものを祭壇に捧げなさいと言っています。

旧約時代、生贄を捧げる時には、肉を切り裂いて内臓を捧げていました。

同じように、私たちも身体の一部一部を清めて捧げていくということだと思えます。目に入ってくるものを清め、口で話すことばを清め、耳に入ってくることばを清めて、捧げていくことです。

このように、祭壇に一つ一つを捧げて清くしていくことが、霊による礼拝です。

一旦何かを捧げておきながら、翻意して、またそれを取り戻してしまうのであれば、神はそれを受け入れることはできないと思えます。そうであるなら、神の火はくだらないと思えます。

エリヤがバアルの預言者たちと闘った時には、捧げ物の雄牛の上に火がくだって燃やされました。同様に、受け入れられる生贄を、神は受け入れると思えます。

セッション1から通して見ると、啓示が与えられ、それによって自分自身が変わり、“真の礼拝、へと導かれていくことがわかります。

外庭と聖所でも礼拝することができますが、神は至聖所で常にまことをもって神の霊と礼拝する人を探しています。

“霊とまことをもって礼拝する、とは、そうした意味があります。

ヨハネ14章を見ましょう。

14:16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。

14:17 その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちに住まれるからです。

14:18 わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに戻って来るのです。

17節に「真理の御霊」と書かれています。その方が、あなたがたと共に住みます。あなたがたと共にいて、あなたがたの内に住みます。

旧約時代にも、預言者や王には御霊が注がれました。しかし、上から注がれましたが内には注がれず、その働きのみを助けました。

“内にいる、”という状態は、新約でイエスが十字架にかかれた後のことで、未来形になっています。旧約時代は外側であって「共におられ」、新約時代では「内側に共にある」ということです。

神さまは、常に人と共にいたいと思っています。“人と共に住む、”というのが、神さまの最終的な目的だと思います。

聖書は、創世記から黙示録までを通して、この“神が人と共に住む、”ということがテーマです。

創世記3章8節を見ます。

3:8 そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。

これは、アダムとエバが善悪を知る木の実を食べた後のことです。神が歩いておられ、神は子どもと共に歩み、共に住みたいと思っていました。「そよ風の吹くころ」とある、このそよ風とは、ヘブル語の「ルア (רוח) 」—— “聖霊、”です。

エデンの園とは、神殿のような幕屋のようなものと思われます。たとえば申命記を見ると動物の捧げ物があつて、またソロモンの神殿では、ぶどうを形どった装飾品がありました。金や宝石がエデンの園にもあり、(創世記2:11～) 神殿にもありました。

出エジプト記25章8節、

25:8 彼らがわたしのために聖所を造るなら、わたしは彼らの中に住む。

神は人と歩き、共に住まわれる方です。

黙示録21章3節には、

21:3 そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、

「神は彼らとともに住み」と書かれています。

ヨハネ1章14節、

1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

“人と住む、”とあり、同じパターンが書かれています。ヨハネは福音書の中で、イエスが神であることを書きたいと思っていました。

イエス・キリストが“いのちの木、”で、その実を食べる者は皆、生きるのです。

ここに神殿の絵があります。(図を示す)

イエスを象徴していて、外庭には“体”、聖所には“思い・考え方 (self-will)”があり、至聖所に“神の霊”がありました。同じように“真の礼拝者”にも、これがあてはまります。

イエスは神殿であるし、神殿の至聖所の中にイエスの霊があります。

エルサレムに神殿があるなら、その外庭・聖所・至聖所にも行きたいと思うでしょう。

“神を霊とまことをもって礼拝する”この「まこと」という場合、私たちが実際に真実でなければならないと思います。

イエス・キリストは「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」(ヨハネ14:6)と、言いました。

“いのち”は、至聖所にあります。神のいる所に“いのち”は、あります。逆を言えば、神のいない所には死しかありません。イエスは、神を知らない人々を“死んだ者たち”と言っています。(マタイ8:22)

“道であり、真理であり、いのちである”とは、イエス・キリストだけでなく“真の礼拝者”たる私たちにも当てはまります。

頭だけの知識ではなく、“啓示”に始まり“いのち”に至ります。

これが、福音の全て (full gospel) です。

私たち (人) の霊と神の霊が一致している——神は、そのような“真の礼拝者”を探しています。

先程は、創世記と出エジプト記を見ました。今度はレビ記を見てみましょう、26章12節です。

26:12 わたしはあなたがたの間を歩もう。わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。

創世記と同じに見えませんか？

申命記23章14節は、どうでしょう？

23:14 あなたの神、主が、あなたを救い出し、敵をあなたに渡すために、あなたの陣営の中を歩まれるからである。あなたの陣営はきよい。主が、あなたの中で、醜いものを見て、あなたから離れ去ることのないようにしなければならない。

旧約・新約を通して“神があなたがたの中を歩まれる”というパターンです。そのように、主がおられるので、敵から襲われることはないのです。

しかし、主が、あなたがたの中に醜いものを見ると、主は離れます。

また、新約で聖霊が与えられたことで、私たちは清く正しく歩めるようにされています。清さなくして主を見ることはできません。

霊とまことをもって歩みたいという願望をもつことが必要で——実際に真実であるということは、その人自体の生き方が証しとなっているということです。

教理は必要なものですが、真理は更に深いところにあります。神の教えの通りに実際生きているということが大切です。

イエスを通してしか、神のもとには行けません。そして、真理はあなたを自由にします。——これらが、一つにまとまっていきます。それが、この世の束縛から解放される秘訣だと思います。真理とは、概念でなく、実際に正しい生き方をすることなのです。

また真理は、真理の反対を学ぶと逆によくわかります。真実の反対は偽りです。私たちは、本物でしょうか？偽物でしょうか？——判断がつかなかったら、啓示が必要だと思います。

イザヤを思い出してください。

初めはイスラエルを非難していましたが、啓示が与えられ、自分が罪人だと悟りました。神は非難したいわけではなく、それを示すことで、変わってほしいと願っています。イエスのようになってほしいと思っています。

二千年前に、ある人がイエスに「あなたはどこに住んでいるのか？」と尋ねると、イエスは「私と来なさい、私がそれを見せましょう」と言いました。（ヨハネ1:38、39）

今日も同じ質問をしたなら、イエスは人々を指して「あの人の中に」、「この人の中に…」と、「私たちの中に、住んでおられると答えられます。なぜなら、聖霊が、私たちの中に住んでいるからです。

これは重要で、神はこのような霊とまことをもった人々を探しているのですから、私たちはいつも神の前にあって、正直であるべきです。

「真の礼拝者」の反対は、「偽善者」です。そのような偽物の「偽善者」になるべきではありません。私たちは自分の力で頑張ろうとしても、うまくいきません。聖霊の助けが必要です。

聖書に「いのちの木」というのが、出てきます。エデンの園にもあり、黙示録でも最後に出てきます。

黙示録22章、

22:2 都の大通りの中央を流れていた。川の両岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。

イエス・キリストが共に住まわれるということが、聖書で預言されています。もし、神が共に住まわれているのなら、なぜ「いのちの木」が、必要なのでしょうか？

それは、常に神の力が「助け」が、必要だということを学ぶためです。

私たちは、神から独立して生きることはできません。「家族、だからです。

仮に、両親と子どもの関係が悪かったとしても、同じ血が流れているという事実は、変えることができません。

霊的にも同じことが言えます。主の霊と私たち（人）の霊が共に住み、離れることはないと思います。

——もう少し話したいのですが、時間の関係で、今回はこれで終わりにします。